

新型コロナウイルスの出現で、世界中が大変なことになっています。

感染拡大を防ぐ為の自粛に伴い、不安は増し、又生活に直に影響を受けられている方も多く、ご心痛いかばかりかと思えます。

道元禪師が教えを説かれた鎌倉時代もまた、冷夏などの気候変動から凶作の頻発そして疫病が流行し、「天下の人種三分の一失す」とまで言われた「寛喜の大飢饉」などがあつた時代でした。

そうした時勢、特に「末法」と呼んで、人々が恐怖の中に置かれた時、道元禪師は、正法、像法、末法という区別はなくて、それは人々の心の中に常にあるものだと言われています。ざわついた、何でも手に入る世が私達の世の中と考えるのか、この不由さが本来の姿なのか、一考する必要があります。しかしこのたびの新型コロナウイルス感染症の拡大は、多くの方々が

しています。

新型コロナウイルス感染症について、正しく知り、風評被害や差別を起こすことのないように努め、知らず知らずのうちに罹患し、又他の方に感染させてしまうことのないように、慎ましく行動しなければなりません。

先が読めない不安の中にあつて、なかなか物事を冷静にとらえ、静かに呼吸をととのえることは難かしいこととは思いますがだからこそ、正しく見、正しく語り、正しく実践していききたいものです。

お盆がやってきました

お盆の時期になると、新幹線の乗車率、飛行機の搭乗率がニュースに流れ、渋滞している高速道路の状況が画面に映し出されます。お盆というと、日本中、いや現在では世界各地で働いている人達も、まるで帰

感染の恐怖に怯え、自らの生活に不安を抱え、動揺しています。

お寺ではどのような形で、檀信徒の皆さんの心を受けとめ、寄り添っていったらよいのか、大般若祈祷会、施餓鬼会を含めた法要行事を、いかにして安全、安心に取り行つていったらよいのかなどと、今もなお模索しています。

この新型コロナウイルスが仮に、終息しても、その生活様式は、この騒動前と全く同じ形態にはもどれないだろうとのことでした。仕事の仕様、店舗の維持管理、学校生活そして家庭の有様、人間関係、日本だけでなく、世界が大きく、大きく変容しようとして



巣本能に導かれるように自分のいのちの発祥地へ帰っていきます。

その昔、村八分になつても、火事と葬式だけは、本来のつき合いをしたという、そのお葬式ですら、このコロナの問題で、直葬、家族葬、通夜なしの本葬儀のみなどといった地域の人々、自分とかかわりのある人々すらも拒絶している姿がありました。

しかし人間の根底には、人々とかかわっていききたいという願望があるわけで、盆、正月という時には、皆が集まつて、共に食事をし、睦み合う時をもちます。

それはきつと、意識する、しないに関わらず、伝えられてきた行事を毎年行なうことによつて、一年の節句（節目と区切り）の中で、自分自身の心を洗っているのではないのでしょうか。

お盆のお参りと共に、家族が顔を揃えた懐かしい食卓、笑い顔と会話、夏の食べ物とそ

れぞれの好物、走り回った野山、泳いだ海や川、過ぎ去ってしまった物語がよみがえります。



盆踊り、花火、夏草の匂い、蝉の声。そういう思い出につながる何物をも、自分は持ち合わせていないという人もまた、年を経るにつれ、不思議なもので郷愁にも似た思いをいだくようです。

お線香を手向けると、沈殿したものが洗い流され、幼い
時に戻り、
穏やかで、素直
な心を取り
もどせるような
気がします。
そして今はこの
世にいない
愛しい人々が、また声をかえてくれるような
私達が人間として生きていくのは、過去
現在、未来にわたるいのちの絆によって結ばれているからです。



慈母でした。

夕食後、風邪気味だから薬をもらってくるといつて立ち上がった父は、崩れ落ちるよう倒れ、そのまま往生しました。

私が二十六才の時、眼蔵寺と玉宝寺のお寺の運営そして保育園の経営が、私の双肩に一度にのしかかってきました。

一方母は、その日を迎えるまでの日々の中で老いていく姿、病んでいる姿、死に迎う姿と、色々の姿を私達にみせてくれました。心の準備ができていた時、そしてできていなかった時、それぞれ迎えた父や母の送りでした。

しかしどれもこれも、許されている人々の姿だと、私に最後の説教を父も母もしてくれただと思つています。そんな両親の年回法要を迎えるにあたり、沢山の思い出をよみ返らせ、今なお守られているありがたさをしみじみ感じたいを思っています。

いのちの絆は、人間のいのちのはかなさの上に成り立っているものですが、いのちの尊さを知り、慈しみの心の大切さに気づくと永遠の広がりとなり、人から人へ、時代を越えて相続されていくものです。お盆は仏の教えと亡き人々の願いに再び巡り合う大切なひとときといえましょう。



父の47回忌 母の27回忌法要に思う

「自分は弟子を育てたけれど、息子を育てたつもりはない」何かの折に、父はよく口にしました。「勉強をする暇があつたら、墓掃除でもしろ」と、およそ教員も兼務していた人とは思えない言葉も毎度のことでした。何かを懇切丁寧に教えてくれるのではなく、見て、聞いて覚えなくてはなりません。父の前では、弱音、泣き事は一切吐けない家庭にあつて、母はまさしく

お寺の近況

毎年五月の第二土曜日に行なわれていた施餓鬼会は、御承知のように、コロナの影響で、檀家総会、皆さんで自由に楽しむ屋台での会食などが中止となり、檀信徒の代表として役員さんに列席をおねがいし、当寺住職、玉宝寺住職の二名で法要をとり行いました。

法要後、手分けして、皆様方のお墓（もしくははお地藏さま、無縁さんなどの各々の場所）へお建て申しました。又お供物は、一枚で申し訳なかつたのですが、マスクがなかなか手に入らない高齢者の檀信徒もおられるときき、孫や玉宝寺で開いている手芸教室の古くからのお仲間協力してもらい手縫いしたものを添えて、お手元へお届けしました。一日も早く安心して、皆で集えることを祈っております。

